

**立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)**

**大学院学生研究**

**2016年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
<b>研究代表者</b> (2017年3月現在のもの記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士前期課程2年	宮崎幸子 印	
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 教授	奥野克巳 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	「人と馬」の関係から福島県南相馬市の復興を探る ーマルチスピーシーズ民族誌の可能性ー		
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のもの記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士前期課程2年	宮崎幸子	
<b>研究期間</b>	2016 年度		
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 198,780円 / (採択金額) 200,000円		

<b>研究の概要</b> (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
<p>福島県相双地方で千年もの間継承されてきた相馬野馬追は、騎馬武者による甲冑競馬・神旗争奪戦などの武技に加え、最後に素手で捕えた馬を神馬として相馬小高神社に奉納し、相双地方の繁栄と安寧を祈る伝統祭事である。相双地方は、昔から人と馬のつながりの深い地域であり、東日本大震災で県内でも最も深刻かつ甚大な被害を受けたが、人と馬が共に参加する形で震災の年にも途切れることなく開催されてきた。本研究は、この相双地方の「人と馬」のインタースピーシーズな関係に焦点を当て、これまで人と馬、そして人間的なるものを越えたものとの関係においてどのような関係を構築してきたのかを探り、相馬野馬追の今後の可能性について考察するものである。</p>

<b>キーワード</b> (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
[ 相馬野馬追 ] [ 人・馬・妙見 ] [ マルチスピーシーズ民族誌 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

### 1. 研究の目的と意義

人間と動物に関する研究は、近年、学際的な領域で注目を浴びようになってきており、新しい視点から人間と動物の関係性を捉え理解するための理論や研究、実践の試みがなされ始めてきている。マルチスピーシーズ民族誌研究は、人間だけに閉じた世界を扱うのではなく、人間の外側から人間性や人間活動を眺める新しい研究群として位置づけられる。本研究は、異種の間関係に目を向けるハラウェイなどの「種的転回」に影響を受けたマルチスピーシーズ民族誌の枠組みの中で、相馬野馬追における「人と馬」の関係性を捉え直し、これまで相双地方では、人と馬、そして人間的なるものを超えたものとのような関係を構築してきたのかを探り、相馬野馬追の今後のあり方を考察することを目的としている。

### 2. 先行研究

現在、人間と動物に関する研究においては、3つの理論的枠組みが主流となっている(Davis&Maurstad, 2016)。まず一つは、ポスト・ヒューマンイズムである。これは、人間中心主義から人と動物という自然界全体に焦点を当てた研究の流れである。二つ目は、生物社会学-人類学の観点であるが、Ingold(2013)は、生き物を、個々の生物学的、社会的存在であり、異なる生物種間の営みや相互作用、生物社会学的な出会いを通して互いに自己を作り上げていく存在と捉える見方を提唱している。そして三つ目がマルチスピーシーズ民族史研究である。Haraway(2008)は、マルチスピーシーズ民族誌研究を、人間と非人間である動物たちのそれぞれ生きている体験をつなぐコンタクトゾーン、もしくは人間と非人間の動物がもつれあったり(entanglements)絡まり合っている(engagements)形態に焦点を当てた研究であると位置づける。歴史の諸層、生物学の諸層、そしてさまざまな自然文化(naturecultures)の諸層が重なり合うなかで、人間は複数の種とともに暮らしているが、一人の人間に成長するというのは、つねに、多くのものたちと一緒にいる過程であり、「何かになること」とは、つねに何かと一緒に「何かになること」であり、「互いに意味ある他者」となることであるとする。

人間と動物に関する研究を概観し、マルチスピーシーズ民族誌研究の枠組みを確認した後、「人と馬」の関係の築き方をより深く知るため、馬の特性と馴致についての先行研究を調査した。近藤(2001)によると、馬の「走る」「見る・聞く・嗅ぐ」「考える」能力は、おおむね「逃げる」ためにある。いち早く敵を発見し、仲間同士でコミュニケーションをとり、より速く逃げる。また一度危険な目に遭った状況や場所は忘れずに記憶し、次に備えておく。馬は、「走る動物」というより「逃げる動物」といったほうが良いという。楠瀬(2011)は、馬はもともと群れを作って暮らす動物であり、一緒に過ごす仲間の馬を何より大事にするのだが、馬たちが野生とは全く違う状態で人間と一緒に、しかも良好な関係を維持しながら暮らしていくためには、馬の馴致が必要であるという。馬の馴致とは、「馬を馴らして目標とする状態に至らしめること」であり、日々の馬への接し方をいう。自発性は馬の顕著な特性であり、大切に育てれば、家畜としての一生に充実と幸福をもたらす(辻谷, 2016)。馬を調教するポイントは、ハミの支点をしっかりとつくることであるのだが、これは言い換えると、馬が人間とコンタクトがとれる状態、馬がきちんと人の話を聞ける状態に持って行ってあげるとのことである(木村, 2011)。Birke(2004)は人と馬の関係について積極的な感情移入が必要であるとし、お互いが気持ちを表現し、応え合い、結びつきを築いていけば、それぞれが馬らしく人間らしくいられる間主観的な世界が形成されるとしている。また Haraway(2008)は、乗馬は「コンタクトゾーン」に人と馬がともにある状態であり、乗馬は人と馬の断絶した関係の橋渡しのみならず、自然と文化の断絶の橋渡しもすると述べている。

次に、日本人の動物観についても先行研究にあたってみた。特に興味深かったのは、人と動物の「距離」が、西洋と比べると日本では動物と人との距離が近く、断絶しているよりむしろ連続関係にあるということである。日本においては、動物と人間の距離を理解するための原理そのものが存在してこなかった(石田, 2008)というのだ。また、中村(1989)によると、日本では相互に自在な変身がみられるが、西洋では動物から人への変身は少ないという。それに対し日本では、動物の不思議な力、いいかえれば普通でない力を持った人間は、なんらかの形で動物に力を与えられていると考えられてきたという。

これらの先行研究から見えてくるのは、相双地方は、人と動物や自然との距離が近く、断絶ではなく連続した関係にある文化を育ててきた地であるということ、相馬野馬追における「人と馬」は、まさにインタースピーシーズな関係が成立していることである。また相馬野馬追は、馬のほかに妙見信仰が要であるが、全国的の各地で信仰されていた妙見が、相双地方で新たに馬の守護神として馬を飼う農家や博労の信仰を集め、全国に広がっていったことは特筆すべき事実である。動物である馬は神馬であり、人と妙見とを結びつける橋渡しをしているとされているということは、すなわち、ここには人と馬のインタースピーシーズな関係のみならず、「人間なるものを超えたもの」との関係においてマルチスピーシーズな関係が成立しているともいえる。

### 3. インタビューからわかったこと

相馬野馬追については、出る人出ない人、馬を持っている人いない人の如何に関わらず、「相双地方を一つにまとめる求心力である」という認識を皆一様に持っていることがわかった。相馬野馬追は、祭事に直接参加する人たちだけではなく、たとえば草鞋を作る人、相馬野馬追を内外に広報活動をするなど間接的に関与している非常に多くの人たちによって支えられている。震災後は、相馬野馬追があるから避難先から時間がかかってもいつか必ず戻ってこようと思っている人、原発事故のために農業

## 研究成果の概要 つづき

ができなくなったけれど野馬追があるから生きていけるという人など、震災以前に比べると、相馬野馬追の存在はより一層、地域の人々の心の拠り所となってきた。

相馬野馬追と馬の関係については、実際に相馬野馬追に出ている人、また牧場経営者を中心に尋ねてみたが、誰も乗りたがらないような暴れ馬であっても普通に乗りこなすことができること、どんな馬ともうまくコミュニケーションをとれることが、いい馬乗りの証だということだった。相馬野馬追の場合は、特に競馬や他の競技などと違い、道路を長距離歩いたり、旗差しを立てたり、重量のある甲冑を着た騎馬武者を乗せて動く、花火を打ち上げる状況の中で動くというように、他では絶対ないようなことが求められるため、それに馴らすためには馬とのコミュニケーションが何よりも大事なのだという。また相馬野馬追での人と馬の理想的なありかたは、「人馬一体」であると話してくれた人もいた。

相双地方の人と馬の関係については、馬はコンパニオンアニマルというより、もっと「人間に寄り添ってくれる存在、人間の息づかいをわかってくれる存在、共に生きる存在」、また、「家族、パートナー、相棒、同志、生きていくためのエネルギーを与えてくれる存在」などと表現は違えど、いわんとしていることは皆一致している。また、馬を飼っている飼っていないに関わらず、ほぼ全員が、「相双地方は人＝馬の地域」という点に関して一致していた。相双地方では、馬に関する民俗風習、馬屋、牧場、乗馬クラブなどが多くあり、馬が広く日常の風景に浸透している。また何といても相馬野馬追で騎馬武者が格好良く馬を乗りこなしている姿を見ると憧れて、自分も馬に乗りたく自然に思うようになるのだという。また近年では、外部から、馬に癒やされにくる人も増えているという。自閉症の人が馬と接するときだけは明るく元気になるという例もあるとのことだった。

## 4. 結論

相馬野馬追が開催される相双地方は美しい自然に囲まれており、今も妙見信仰が色濃く残っている地域である。そういう環境の中、妙見に相双地方の繁栄と安寧を祈る祭事として相馬野馬追は位置づけられている。相馬野馬追における「人と馬」の関係は、人は人らしく、馬は馬らしくいられる間主観的な関係を作り上げているという点において、まさにインタースピーシーズな関係であり、相馬野馬追に向けての練習は、馬とのコミュニケーション、相互信頼を深めていくプロセスであるといえる。また馬は、人と妙見の橋渡しをする重要な存在であり、馬がいなかったら、地域の繁栄・安寧を祈る相馬野馬追の存在が成り立たなくなる。このように相馬野馬追を眺めてみると、まさに、「人と馬」そして、人間的なるものを超えたものとのマルチスピーシーズな関係が浮かび上がってくる。相馬野馬追は、人と馬の共生のみならず、震災後の自然と文化の断絶をも乗り越える可能性も秘めた、重要な祭事なのではなかろうか。馬と共に生き、馬を信頼し馬に願いを託すことで、人間の世界だけでなく、もっと幅広い世界観、言い換えると自然との一体感のようなものも培われてきたのではないかと。相馬野馬追では、元競走馬のサラブレッドでさえ怖がり尻込みするような場面も多々あるということだが、そういう状況下で祭事を成功させるためには、人と馬の信頼関係や良好なコミュニケーションが非常に重要になってくる。しかも、祭事に出るのは、プロの騎手ではない。皆普段は仕事をしている一般人がほとんどだ。そのような普通の人たちが、プロの騎手顔負けに、馬が怖がらないように話しかけ一般道を普通に歩いたり、旗を差し馬に乗って丘を駆け上がっていく。実際に会場で野馬追を観覧していると、競っている場面でさえ、温かい感情が湧き起こり癒された気持ちになる。これは、人だけでなく馬と一緒に参加しているからこそその空気感であり、だからこそ皆、相馬野馬追に惹きつけられるのではないだろうか。

## <参考文献>

- Birke, Linda. (2004). "Dreaming of Pegasus, or Quin's Story." In *Horse Dreams: The Meaning of Horses in Women's Lives*, edited by Jan Fook, Susan Hawthorne and Renate Klein, 207-208. Spinifex Press.
- ダナ・ハラウェイ (2013). 『犬と人が出会うとき』(高橋さきの・訳). 青土社. [原著: Haraway, Donna. J. (2008). *When Species Meet*. University of Minnesota Press. ]
- Davis, Dona. L. & Maurstad, Anita. (2015). *The Meaning of Horses: Biosocial Encounters*. Routledge.
- Ingold, Tim. (2013). "Prospect" In *Biosocial Becomings: Integrating Social and Biological Anthropology*, edited by Tim Ingold and Gisli Palsson, 1-22. Cambridge University Press.
- 石田 戔 (2008). 『現代日本人の動物観 動物とのあやしげな関係』ビイング・ネット・プレス.
- 木村忠之 (2011). 「馬を再生させ、成長させる [木村忠之の仕事]」『ROUNDERS』vol.1, pp.22-29, ROUNDERS.
- 楠瀬良 (2011). 「本来は野生の動物なのに、なぜ馬は人と仲良く暮らせるのか？」『優駿』6月号, 121-122頁.
- 近藤誠司 (2001). 『アニマルサイエンス① ウマの動物学』東京大学出版会.
- 中村禎里 (1989). 『動物たちの霊力』筑摩書房.
- 辻谷秋人 (2016). 『馬はなぜ走るのか やさしいサラブレッド学』三賢社.

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① なし

② なし

③ なし

④ 2016年7月15日(金)

第2回マルチスピーシーズ人類学研究会      **研究発表**      於：立教大学